

大和・大宇陀『森野旧薬園』の植物相分析に基づく時系列的解析

○近藤 小百合¹, 道下 雄大², 森野 てる子³, 高橋 京子^{1,2}(¹阪大院薬,²阪大博,³森野旧薬園)

【背景・目的】史跡・森野旧薬園(奈良県宇陀市:以下、旧薬園)は享保十四年(西暦 1729 年)に森野藤助によって創始された薬園である。八代将軍吉宗のもとで展開された享保改革期、生薬の国産化は緊急課題で、藤助は採薬調査の協力ならびに漢薬種の育種・育苗・栽培に尽力した。以来 280 年、旧薬園は二次的自然環境を再現する形式で薬用植物の栽培を継続しており、生物多様性の保全と国産化の実践による生薬の安定確保の視点から有用なモデルと考えられる。そこで、①旧薬園の植物相分析調査を実施し、古文書に記載された薬種・有用植物生育状況と比較解析する、②環境指標植物である *Taraxacum* 属植物について遺伝子鑑別を行い、園内の人的影響を把握することを目的とした。【方法】①2010 年 9~11 月にかけて植物相分析を実施した。森野家古文書(松山本草:1750 年頃・草木葉譜:1848 年他)ならびに 1930 年~1966 年の文献(日本薬園史の研究、森野旧薬園小誌等)から時系列解析を行った。②園内の数か所で採取した *Taraxacum* 属植物の葉より DNA を抽出精製し、PCR-RFLP 分析法で遺伝子型を鑑別した。【結果・考察】①2010 年 9~11 月の植物相分析から、栽培種・自生種あわせて、約 100 科、約 400 種の植物が確認できた。時系列解析ではバラ科、セリ科、ユリ科、キク科が比較的多く、多様な植物種の存在が考察できたが、現在の旧薬園でも同様の傾向が認められた。また、1729 年~40 年に幕府より下付された漢種 35 種のうち 4 種が現在まで継続的に栽培されていた。これら薬種は、本地域における適応の可能性を示唆する。②遺伝子解析の結果、園内で採取した *Taraxacum* 属植物はすべて在来種型を呈し、外来種型が多く認められる周辺地域と異なったことから、薬園としての人為的な環境負荷と生物多様性のバランスについて考察する。